多治見市文化財保護センター企画展

―多治見市の出土品を中心に―

太白焼展

たいはくやき

【はじめに】

「太白焼（たいはくやき）」と呼ばれるやきものがあります。しかし、「太白焼」という言葉の定義は、はっきりしていません。では「太白焼」とは一体何なのでしょうか。

現在、「太白焼」というと一般的には、19 世紀頃に瀬戸・美濃地方で作られた、陶器や炻器（せっき）に染付を施したものを指しています。炻器とは、陶器よりも硬く焼き締まり、緻（ち）密な素地をしていますが、磁器よりは粗い素地をしているやきもののことです。

本展では、19 世紀前半から中頃にかけて多治見市で作られた「太白焼」を中心に、可児市や土岐市、瀬戸市など近隣の生産地から出土した「太白焼」もご紹介します。

陶器や炻器の、粒子が粗いボディの上に染付で模様を描くと、じわっと滲（にじ）んで柔らかい表情が生まれます。また、鉄などの不純物による素地の濁りのある色も、温かみがあって魅力的です。太白焼の素朴な美しさを、本展でどうぞお楽しみください。

併せて、「染付」の技術で多治見市無形文化財保持者に認定されていた、故・青山禮三（れいぞう）による炻器染付の作品もご覧ください。

1.「太白焼（たいはくやき）」の謎

そもそも「太白」という言葉は、砂糖や夜空に輝く金星などの、白く輝くものを表す言葉です。19 世紀に入り、瀬戸から磁器の製法が伝わると、従来の陶器とは異なる白い素地のやきものが誕生し、それらを「太白焼」と呼び始めたと考えられます。では冒頭で述べた通り、なぜ「太白焼」の定義がはっきりしていないのでしょうか。それは、昔の文献に出てくる「太白焼」の言葉の捉え方に違いがみられるためです。「太白焼」が文献でどのように紹介されているか、いくつか見てみましょう。

「太白焼」≠「染付」

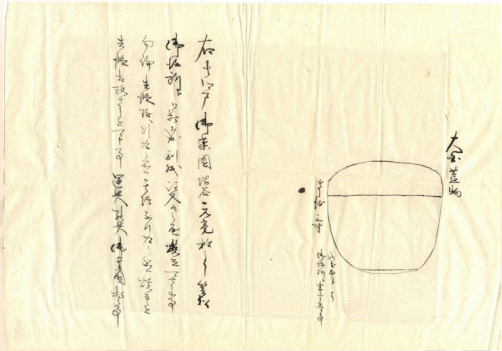
・「染付并（ならびに）太白類ニ至迄」（「美濃焼物取締規定」天保 6 年（1835））→「染付」と「太白」が別のものであると記されている。

「太白焼」＝無地の白いやきもの

・「文政より此猪口を白のまま白玉をかけて焼て無文なるを太白と云う」（『守貞謾稿』江戸時代後期（天保 8 年（1837）起稿、嘉永 6 年（1853）に完成））

→「太白」は、白い無地のやきものを指している。

・西浦家文書の「御薬園御用太白蓋物寸法書」（江戸時代安政年間）では、御薬園に納めるための上等な無文の白い磁器と思われるやきものを指して「太白」と呼んでいる。（右図・参照）



▲「御薬園御用太白蓋物寸法書」西浦家文書（個人蔵）
※図中の白い無地のやきものを「太白」と表記している。

「太白焼」＝白い素地（染付・赤絵含む）

・第 1 回内国勧業博覧会（明治 10 年（1877））の出品目録に「盃（染付草花画）」、「盃（太白）」、「盃（太白染付草花画）」の記述がある。（『明治十年内国勧業博覧会出目録』内国勧業博覧会事務局編）

・シドニー万国博覧会（明治 12 ～ 13 年（1879 ～ 1880））の出品目録に、「鳥獣焼（太白赤絵）」、「中湯呑〔盃洗〕（太白岩竹画亀茶附）」の記述がある。

→白い無地の磁器と思われる「太白」に加え、染付や赤絵（上絵付）が施された「太白」も出てくる。

・第 2 回内国勧業博覧会（明治 14 年（1881））の出品目録に「太白」の記述があり、「白地」の表記も目立ってくる。

・第 3 回内国勧業博覧会（明治 23 年（1890））の出品目録には、「太白」の表記が消え、「白磁皿」や「白盃」などの表記が目立つようになる。

→白い無地のやきものの表記が「白磁」へと統一されていく様子が伺える。

「太白焼」＝炻器染付？

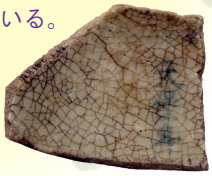
・「文化年中創（はじめ）テ太白茶碗ヲ焼キ爾（じご）後磁器ヲ製スルニ 至レリト云」（『府県陶器沿革陶工伝統誌』（明治 18 年（1885）刊行）

→先に「太白焼」が登場した後で磁器が作られたとあり、「太白焼」と磁器は別物であると記されている。

・「文化元年より、新製大白品（以下原文ママ）を焼き出すに至つたのである。」

・（従来の本業焼（ほんぎょうやき）（陶器）は、）「山より掘取りたる原料土を、其ままにて造りたるものであつて、大白焼とは其原料土を濾過して造つたもの」（これをさらに進歩させたものが　美濃地方の磁器になる。）（ともに『市之倉村誌』（昭和 4 年（1929）刊行）

→「太白焼」は新製焼であるが、陶器と磁器の中間に位置するものであるとも述べている。



天保 2 年（1831）銘広東碗 ▶
（瀬戸市埋蔵文化財センター所蔵）
※作られた年代が分かる資料。

江戸時代後期、磁器質のやきもの（炻器（せっき）を含む）が誕生した際、従来の陶器（本業焼）と区別するために「新製焼（しんせいやき）」という言葉が生まれました。以上の資料から、この頃の「太白焼」とは陶器ではない白い無地のやきものを指していたと考えられます。

明治に入ってからもしばらくの間は、上質な白い磁器と思われるやきものを指して「太白焼」と呼んでいます。しかし、「太白染付」や「太白赤絵」の表記が登場するなど、染付が施されているやきものにも「太白焼」の言葉が使われるようになります。そして「磁器」という言葉が誕生すると、表記が統一され、白い無地のやきものが「白磁」と呼ばれるようになったと推測されます。このことにより、「新製焼」（炻器と磁器）から「磁器」の概念が切り離されて、残った炻器染付が「太白焼」と呼ばれるようになったのではないかと考えられます。

2.「太白焼」の意匠と器種

「太白焼」にはモデルとなるやきものがありました。18 世紀前半から 19 世紀前半にかけて、主に肥前や波佐見（長崎県）、砥部（愛媛県）などで庶民に向けて作られ全国的に流通した、いわゆる「くらわんか」などの粗製の磁器です。「くらわんか」は、上質な磁器に比べると、簡素な絵付けが施されており、味わい深い魅力があります。

それを倣って作られた「太白焼」は、「くらわんか」よりもさらに簡素な絵付けが施されています。草花文や山水文、幾何学文など多様な模様が描かれ、磁器に比べて厚く重厚感のあるボディと相まって、「太白焼」独自の力強い美しさとなっています。江戸時代後期に経済力をつけてきた庶民が、高価な磁器に似せたやきものである「太白焼」を使用したと言われており、日常の生活に彩りを求めていた様子が伺えます。

「太白焼」の器種で多く作られたのは、飯碗、湯呑、皿、鉢、深鉢、蕎麦猪口、小杯、灯明皿など、日常で使うための器がほとんどです。ここで、いくつか「太白焼」の代表的な器種とデザインをご紹介します。

飯碗

「太白焼」の飯茶碗は、大きく分けて以下の 3 種類があります。

- 腰が丸い碗形のタイプ
- 高台が高く、直線的に立ち上がる、「広東碗」と呼ばれるタイプ
- 口縁が外側に反っている「端反碗」と呼ばれるタイプ

飯碗に限らず、「太白焼」の見込みには、ワンポイントの模様があしらわれているものが多くあります。

▲炻器染付菊文碗
（市之倉水神窯出土）

▲炻器染付捻文広東碗・外観と見込み
（滝呂東窯出土）

▲炻器染付紅葉文端反碗
（高田出土）

皿

▲裏から見た様子

◀上から見た様子

▲炻器染付扇文四寸皿（高田出土）

鉢

▲裏から見た様子

◀上から見た様子

▲炻器染付扇に山水文鉢
（市之倉洞窯出土）

出土品の皿の中では、四寸（約 12 センチ）の皿が多く見られます。鉢は、口縁が玉縁上で、蛇の目高台を持つタイプのものが多いです。

湯呑

▲炻器染付花文筒形湯呑
（市之倉沢窯出土）

▲炻器染付箱形湯呑
（平野欅窯出土）

湯呑には、腰が丸くて胴が円筒形の筒型湯呑と、高台脇から垂直に開き、胴も垂直に立ち上がる箱型湯呑が多く見られます。

その他

▲炻器染付格子文仏飯器
（古瀬戸小西窯出土）

▲炻器染付山水文蕎麦猪口
（市之倉水神窯出土）

3. 多治見出土の「太白焼」について

多治見市内を見ると、「太白焼」が出土した遺跡はたくさんありますが、中でも市之倉町、高田町、滝呂町、平野町の窯跡から特に多く出土しています。

その理由として、新製窯株という新製焼（磁器）を焼くために必要な権利が、文化 5 年（1808）に美濃地域（市之倉、滝呂、下石）に新たに許可されていたことが関係しています。江戸時代、美濃焼物の生産には窯株という権利が必要でした。その中でも新製窯株は、従来の陶器とは違う新製焼（磁器）を焼くために必要な権利です。美濃地方で「太白焼」は新製焼として扱われましたので、市之倉や滝呂など新製窯株が許可されたところで「太白焼」の生産が始まり、そして徐々に高田など周辺の地域でも作られるようになりました。本展では左表の、出土品が多く見られた多治見市内の窯のものを中心にご紹介します。

市之倉	中窯、洞窯、水神窯
滝呂	東窯、中窯
高田	大ザヤ窯、白粉窯
平野（多治見村）	欅窯、西窯

4. 現代の「太白焼」？！ 青山禮三作品

「染付」の技術で、多治見市の無形文化財保持者に認定されていた青山禮三（1919 ～ 2017）の作品は、地元の木節粘土を使った炻器質の素地に、天然の呉須を用いて絵付けをするという、まさに「太白焼」を彷彿とさせる制作方法です。

青山禮三は昭和 28 年（1953）より作陶をはじめ、同 42 年（1967）に多治見市小名田町に「草の頭窯」を開窯します。窯を開いたばかりの頃は、型を使った鋳込みの製品や、電動ロクロを使用し、様々なタイプの作品を手がけていました。開窯から 5 年ほど経ったころ、大平（可児市）の古窯跡で見た陶胎・炻器染付に感銘を受け、このような染付のやきものを作りたいと思い始めます。以降は型や動力の使用を止め、手回しロクロでの制作へと移っていきました。

温かみのある炻器質の生地の上に描かれた、中国の古染付を思わせる軽妙洒脱な絵模様は、青山禮三作品の最大の魅力です。

氏は漢詩や仏教の世界に造詣が深く、十牛図や仏画などを作品の題材として多く用いています。またウサギが好きで飼っていたため、ウサギをモチーフにした作品も多く手がけています。ムッチリとした肉付きの愛らしいウサギの絵付けから、動物への愛情深い眼差しが感じられます。

▲「瑞兎図大皿」青山禮三（個人蔵）

【もっと詳しく！ 炻器とは？！】

やきものは大きく分けると、土器・陶器・炻器・磁器の 4 種類に分類されます。常滑焼・備前焼・信楽焼など、土を高い温度で長時間ギュッと焼き締めて硬くした、いわゆる「焼き締め陶」も代表的な炻器です。

炻器は、陶器よりもよく焼き締まり、硬いボディをしています。磁器は吸水性がなく、透光性があり光を通しますが、炻器は磁器より吸水性があり、鉄分などの不純物により着色しているため光を通しません。

炻器は、使われた原土によって陶器に近い性質のものと、磁器に近い性質のものがあります。「太白焼」の、炻器と磁器の胎土を見比べてみると、素地の細かさの違いが良くわかります。

▲炻器断面（炻器染付草花文鉢・滝呂出土）
※緻密な素地をしており、磁器に近い炻器です。

▲磁器断面（染付煎茶碗・市之倉水神窯出土）

▲炻器断面（炻器染付草花文鉢・市之倉東嶋窯出土）
※素地がやや粗く、陶器に近い炻器です。

▲陶器断面（飴釉徳利・滝呂出土）

【主要参考文献】
・「市之倉村誌」土岐郡市之倉村役場（1929）
・「多治見市史」多治見市（1976・窯業史料編、1980・通史篇 上）
・「美濃窯の焼物」多治見市教育委員会（1993・多治見の古窯 第 3 号）
・「瀬戸市史　陶磁史篇」愛知県瀬戸市（1993・第 5 巻、1998・第 6 巻）
・「ありがとう：青山禮三傘寿記念作品集」青山禮三（1999）
【主要参考資料】
『御薬園御用太白蓋物寸法書』西浦家文書（多治見市図書館所蔵）
『春日井 世二属 瀬戸ノ部』（鶴舞図書館所蔵）

多治見市文化財保護センター企画展パンフレット
「太白焼展 ―多治見市の出土品を中心に―」

●展示期間・場所　2019 年 1 月 21 日（月）～ 6 月 28 日（金）
多治見市文化財保護センター展示室
●発行　多治見市教育委員会・文化財保護センター
〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘 10-6-26
TEL(0572)25-8633 FAX(0572)24-5033
URL http://www.city.tajimi.lg.jp/bunkazai/
●発行部数　700 部（印刷費用　54,250 円）